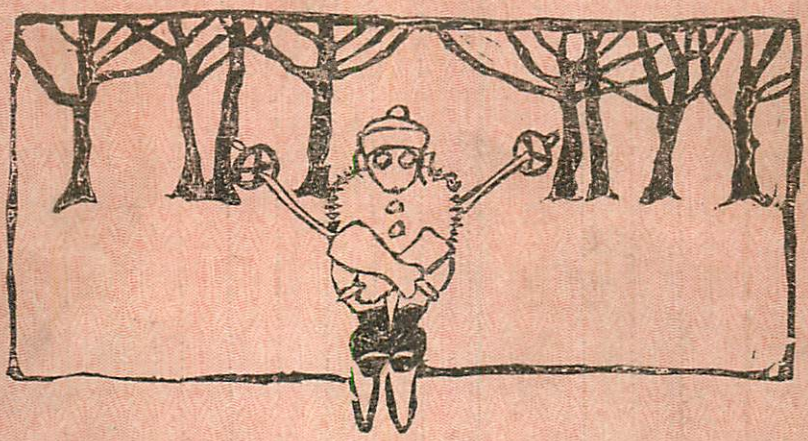
山とスキー



第十一號

大正拾年六月七日第三種郵便物認可大正拾一年一月十四日印刷同年一月十五日發行

第十一號目次

記事

スキーの民衆化……稲田昌雄（二）
スキーと競走……高橋次郎（八）
スウィングに就て……仙波正雄（一一）
札幌附近の地形的考察……夏間生（一五）
ザッツとは……廣田戸七郎（一七）
山の色とスキー……六鹿一彦（二三）
本邦に於けるスキー團体……（二六）

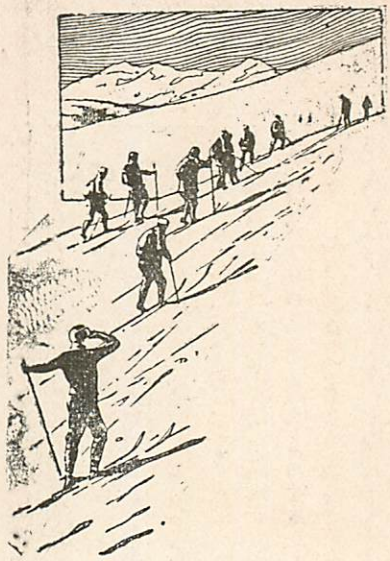
圖版

犬橇……（一）
ドレースプルング……（一三）
ジャンプ……（一九）

With the aurora borealis flaming coldly over head, or the stars leaping in the frost dance and the land knumb anb frozen under its pall of snow, this song of the huskies might have been the defiance of life, only it was pitched in minor key, with long-drawn wail-ings and half-sobs and was more the pleading of life, the articulate travail of existence.

—The Call of the Wild—

Jack London



スキーの民衆化

東京スキー倶樂部　稲田昌植

目新しいものは人を引きつける力を持つて居る。人は目新しいものを好む性質を持つて居る。此の兩者は觀念上區別し得られるものであるけれ共、實際に於ては兩者は同時に生するので、同時にして且つ同事の觀がある。前者は事物の吸引性とも稱すべきものであつて、後者は人の好奇心による場合が多いのである。

事物の吸引力の大小は其の事物の價値の大小に正比例する。價値小なる時は假令一時優勢な吸引力を有しても時と共と減少を來すに反し、價値大なる時は常に有力な吸引力を有し、眞價益々上つて吸引力愈々增加するに至り時と共に優勢となるのである。

吸引力は右の如く時の經過と共に或いは增大し或いは減少するものであるが、好奇心は之に反し當初の好奇心が單純であればある程時と共に減少する許りである。即ち吸引力の方は將來の優勢を期待し得る場合あるに反し、好奇心の方は、此の期待を持ち得ないのである。この故に新事物を普及しむる時に當つて右兩者の何れを主として利用するかによつて其の宣傳の効果を大略推察する事が出來る。自から其の事物に多大の價値を認めないものは專ら人の好奇心を利用する權道を用ゆるのであるが、其の眞價の確實なるものを有して居る事物の宣傳は斯る奇手を用ゆる必要もないので正面から堂々と其の事物の吸引性を武器として普及宣傳に努力するものである。

右の事柄をスキーに當て篏めて考へて見るに、宣傳の當

初に於ては人の好奇心を利用する事も多少はあつたし、又好奇心を試みた人も確かにあつたのである。然しスキーの如き顯著な價値を有するものは、敢て好奇心を煽る事を努めずして正面からの宣傳普及法を原則となすべきである。スキーが著大なる價値を有する事は正にスキー宣傳者の强味であつて之れあるが爲にスキーは我國に於て正式に練習を始めてから僅かに十餘年にして之を他の運動諸技に比して比較にならぬ程の盛況を呈して居るのである。始めは單純なる好奇心でやつたものも一度やり出すが最後スキーの價値を認めて純なスキー黨になつて仕舞い好奇心は吸引力に變化する狀態である。スキーをやり出したものは特殊の事情によるものの外は殆んど中止したものを聞かない。スキーは實に恐る可き强力な誘惑的？な吸引力を有して居るのである。

右の如き事情であるからスキーは民衆化す可き性質を確かに有して居る。默つて居つてもスキーは年一年と其の勢力を增加しスキー者も殖えて理想の大隆盛の時期に達するに相違あるまい。然し何等か適當な方法があるならば其の大隆盛の來るのを早める手段を取る事は必要である。理想の境に進みつゝある經路を運命的に見つめて居るのみでは不充分である。其の過程をより速ならしめる方法を取らねばならぬ。監視するだけでは消極的である。指導と云ふ積極的方法に出るのを必要とする。スキーが價値あるものであればある程之を一日でも早く一人たりとも多くに普及してスキーの民衆化を計る事は既にスキーを知り且つ之が價値を認めて居る我々スキー黨の任務ではあるまいか。以下此のスキー民衆化について二三の事項を述べて見たいと思ふ。

第一に云ひたいのは「宣傳」である。廣くスキーの存在を世人に知らしめ且つ其の價値を認めしむる事である。而して之には二方法がある。即ち紙上宣傳と實物宣傳とがある

紙上宣傳即ちペーパープロパガンダ中新聞雜誌上に於ける宣傳は近來はスキーシーズンたる十二月より翌年三四月頃迄は新聞雜誌の方より進んでスキー記事又は寫眞を揭載する樣になつて、大に人意を强くするものがある。朝日新聞が伊吹山でスキー大會を主催し又は運動年鑑に大正九年度よりスキー欄を新設するが如き、又ツーリストビューローの機關雜誌ツーリーストはスキーシーズン中の各號には常にスキー記事を出すが如き大に喜ぶ可き現象であつて、新聞雜誌の勢力の大なる現今に於て之等の記事の影響は實に大なるものがある。スキー黨は常に優秀の材料を當業者に提供する事を勉めねばならぬ。

スキー專門の定期刊行物は我國では未だ極めて小數である。高田に於てスキー練習開始の當初に於て「スキー」と題する讃報を出した事があるが三號位で中止したと記憶する現在では「山とスキー」が唯一のものであり且つ最も眞摯な

出版物である。同人諸君に多大の敬意を表する所以である

紙上宣傳に對する實物宣傳にも數種をあげる事が出來る即ち展覽會、活動寫眞會、スキー大會及びスキー旅行等がその主なるもので、講演も之に入れてよいと思ふ。

此の實物宣傳も近來は非常に廣く行はれて居る。

各スキー地のスキー團体は毎年大會をするのは殆んど例外なく行はれて居る樣である。當初は單純なものであつたが、漸次その規模を大にし單に競技場のみに限らず廣くその範圍を擴張して十里二十里の大競爭圈を形成する事になつた樣である。從てその効果も從前に比して增加するのである。

展覽會、活動寫眞會及び講演等は主として都會に於て行はれる樣子であるが、此の三者の中その一を單獨に行ふ事もあるし、又その二者若くは三者を同時に行ふ事もある。講演の不足を伴ふために通例講演會には展覽會を同時に開きスキー及その關係品一切及び寫眞等を陳列して講演と相俟つて效果を期待するのである。然し講演もあり實物の展覽もあるか之れだけでは實際の滑走氣分を出すには未だ不充分であると云ふ時には活動寫眞を同時に映寫してより大なる效果を收め樣とするのである。スキー活動寫眞も最近では日本でもよいものが手に入る樣になつたが、以前はスキーの活動寫眞と云へば內地の各スキー大會の狀況を撮影した粗末なものに過ぎなかつた。近來は同じ日本のものでも撮影方法も大分巧者になつて來た上更らにスキー界の隆盛となるにつれて、フ井ルム輸入者もスキーに關して了解を有する樣になり、スキーのフ井ルムを輸入する樣になつたのである。以前はフ井ルム商人の所に行きスキー寫眞を注文して愈々撮影する事となつて試寫をして見ると、スキーでは無くてスケートの寫眞であつたりして大に困つた事もあつた位である。かゝるスケートとスキーを混同する樣な事は近來は殆んど無くなり大に便宜を增して來た次第である。活動寫眞の大流行の際スキー活動寫眞の宣傳は大に效力がある樣に思はれる。

スキー旅行も近來は大分大規模のものが行はれる樣になつた。十數日又はそれ以上に渡つて數十里の山野を跋涉してスキーの眞價を實地に示しつゝ旅行するので宣傳方法としてその效果は頗る大である。このスキー旅行には山頂を極め大平原を縱橫に滑走する愉快の外に、雪國に居り乍ら未だスキーを知らざる者にスキーを實地に敎示する愉快と實效があるのである。我國の雪國地方であつて未だスキー地とならざるものが大分ある。之等の地方をスキー地に編入するは勿論かゝる地方を發見するのもスキー旅行の一の目的となり得るものである。足に覺えのあるスキー者には常にスキー旅行隊を組織して時の許す限りスキーの Propaganda tour をする事をお勸めしたいと思ふ。

第二に云ひたいのは「スキー文藝」の勃興と云ふ事である

即ちスキーに關する文學、繪畫、彫刻の發達進歩を計りたいのである。

全ての事物は文藝と云ふ背景があつて非常に變化され温味を持つ樣になり且つ一般に親しみを有する樣になるのである。これ亦民家化の一手段たるを失はない。

現在の我がスキー界では文藝味は可成りに乏しいと云つてよい。殆んど絶無と云つても大した抗議は出まいと思ふ然しこの事は淺念の事ではあるが、決して悲觀するには當らない。スキー文藝の問題は過去に於ては何も云ふ可き事はない。將來の問題である。改良又は改造と云ふ點ではなくして實に創設の事業である。創設とは其礎から作り上げる事である。この時には深重な考慮の下に最良最適の第一歩を作り得るのである、この點に於て過去に於て何物もないと云ふ事は寧ろ幸である。多少なりとも過去に何物かがあれば之を考慮して却つて將來の建設に妨害となるかも知れないのである。この意味に於てスキー文藝に過去の「無」を祝福し前途の「有」に正當な第一歩を踏み出さねばならぬのである。

文學には詩、歌、句、散文及び其の他の諸文章がある、藝術とも云ふ可きものには繪畫寫眞及び彫刻等を入れ得るのであるが、現在は勿論出色のものは無いのであるが、將來にスキーを背景にした大文章、大美術の出現を生まざるを得ない。繪畫と云へば現在の帝展審査員の金山君及び毎回帝展に入選される金子君等はよく北國に旅行され雪に緣のある方である。製作される畫も雪とか冬に因めるものが多い樣である。スキーにも興味を有せらるゝ樣子である。一つスキー印象派とでも云ふ可き一派をたてゝ頂きたいと思ふ。

スキー文藝に付て云いたいのは其の特徴である。之に關しては嘗て余がツーリストに寄せた所を玆に再錄したいと思ふ。

スキー文藝はスキーを離れて存在し得ない以上其の特徴も亦スキーの特徴を表象するものでなければならぬ。而してスキーが北國の冬季の勇ましい快技である以上、スキー文藝の特點は先づ北國の大自然に育たれた情調を有する事で無ければならない。スキーの盛んな北歐からイブセンを出した事を思へばスキー文學は先づ地の利を占めて居るとでも云はふか、文學の生ずる可能性は確かにあると思ふ。次の特徴はスキーが勇壯のものである關係上その文藝も亦勇壯のものでなければならない。勇壯、男性的、豪宕等全て明るい感じのするものであつてほしいと思ふ。

北國は寒風吹き、吹雪が荒れる天地である。北國の自然は確かに南國の自然よりは人に辛く當る觀があるのであるが、人は決して自然に征服される許りではない。自然に感化されつゝも、自然と戰ひ之を利用して玆に新しい天地を見出すのである。而してその自然と戰ふ程度は北國は南國

に比して大であろふと考へられる。この故に北國に生れる文藝は南國のものに比し一層深刻であり。意氣に充ちて居る可きである、

スキー文學者、スキー藝術家の出現は我國でももうあつてもよいと思ふ。

終に今春ダボスより東京スキー倶樂部に來た印刷物の中からSong of tue ski(T. Hannay)なるものを次に轉載する。

The Curlers love the Roaring Game
on a hardy winter day
When the ice scorded and the frosty board
Resounds to their boisterous play.
The bobmen love with a whoop and shove
to be launched on amad career
When the roads are clean and the curves are keen
With a man at the helm who can steer
But the long light lath where there is no patn
And the big blue heavens for me
And the big bright world all robed and pearlet
Hurrah for the slippery Ski!

It is fine to which and whisk and wneel
on the ringing swimming skate;
It is fine to foot it toe and heel
With a light-foot limber mate.
But the long lone hights and a breeze that bites
And the cry of the wounded snow
On the roof of the world all gemmed and pearld
With the weekday world blow!—
Oh the long litle lath where there is no path
And the rush and the swell for me
of the virgine snows on a team thal goes—
Hurrah for the slippery Ski!

第三に云いたいのは婦人スキー者の增加と云ふ事である男子のスキー者を得る事は比較的容易であるが、婦人をスキー者にする事は多少の困難を伴ふのである。然し所詮は婦人スキー者が澤山出來る程にならなければスキーの發達普及は本物でない。徹底的でないと云はなければならぬ。

スキーは決して男子の專有物ではない。女子も亦之をなし得るものであり又しなければならぬと思ふ。スキーには決して危險はないし、又容易に習得が出來るものである。而かも体育及精神上偉大な効果を有するものである。決して男子のみが專有すべきものではないのである。

婦人が之をするには然し現在の日本婦人の服裝では不可である。洋裝が失張りよい。外國婦人は盛んにスキーをやり、日本婦人がしないのは此の點も原因の一つであろふと

思はれる。然しやると云ふ決心があれば服裝は立所に解決される。越後地方の各學校では襠のある袴の裾を膝にくゝり付けてやつて居るがこれで結構である。男子に似た服裝ならば尙結構であるが普及させるにはあまり手數のかゝらぬ方法を取る可きである。雪國の女學生等は先づ最初の女子スキー者とならなければならぬ、先年餘が札幌に居つた際既に札幌高等女學校では松野教諭の指導の下に練習をした樣であるが男子禁制であつたのでどんな狀況であつたか知る事が出來なかつたが今に續いて居るとすれば同校のスキー歷史も相當に古いものとなつて居る筈である。未だ始めない女學校があるならば早速始めてほしいと思ふ。校庭內の小高い所から滑る位ではなく堂々と練習を始めて大會なり競技會でもやるがよいと思ふ。全ての運動競技で女子は漸々男子に近づぎつゝある昨今スキーも同樣であつてよい。

体育及び德育上偉大な効果をあげるスキーを練習する事は將來の國民の母の有す可き一の資格であると思つて頂きたいと思ふ。

以上スキーの民衆化と題して二三の項目につき極めて粗雜な事を述べたが幾分なりとも同好者の參考ともならば幸之に過ぎないのである。（一〇、一一、一五、）

ループス

◆氷と雪の溫かさ。サガレン地方の話であるが越冬の小屋を組んだ際、不充分な材料の爲に、所々に隙が開いて風が這入る。之を防ぐ爲に、小屋に水を浴びかけると、水は凍つて、小屋には、すつかり氷の壁が張られてしまふ。それで冷風を防ぐことが出來、粗末な小屋でも十分に暖を保つことが出來る相である。但し、こうして置くと、春が來て、氷が融け出すと中には大いに困ると云ふが、冷たい氷が溫さを保つて呉れるとは、南國の者には、一寸をかしく思はれることである。

（高連山地の冬期旅行には、溫度は多くは氷點下であつて、寒い暖いと云ふのも、マイナスの場合である。だから、〇點下二度三度位は暖かい方である。二月。ある山の平で、雪の中に寢た事があるが、雪の穴に這入つて、スキーを桁にして雪の屋根を作ると穴の中の溫度は、午前四時、六時と云ふ頃にも零下二度三度位。時にはプラス二度三度になつた事もある。勿論焚火もなしで、只一つの提灯を點して居たゞけ。而し、寒暖計の目盛がそう想像する程恐ろしい寒さを示さなくとも、溫度やその他の條件が、身体を怖ろしく寒くする。身体の周圍の雪が融けて行くのを見て、体溫が多量に奪はれた事に氣付くのである。そのときの外氣の溫度はたしかマイナス十一二度だつたと思ふ。

スキーと競走

小樽高等商業學校スキー部　高橋次郎

近來非常な勢でスキーが盛んになつて來た。現在の日本のスキー界を見るに、各スキー團体は大低毎年スキー大會なるものを開催して多くは競走を行つて居る。が、まだジャンプやスウ井ングの競技は中々見る事が出來ない。

競走は確かに若い人々の心を捕へるには良い方法である。多くのランナーが猛烈に練習するから、色々の點に於て得る所も多いが、弊害も亦之に伴ふ。そして、兎に角スキーは益々盛んになつて行く。然し、これはスキーが本當に進むべき路を辿つて盛んになつて居るかどうかと云ふと、それは疑問である。何か不純なものが盛んになりつゝあるスキー界を侵しつゝある樣にも思はれる。現在の樣な有樣では、競走は一方に於てスキーを盛んにするが、他方に於てはスキーを墮落せしむるものである。斯う云つただけでは、或は腑に落ちないかもしれないから、此事について運動としてのスキーの立場から所懷を述べる事にしよう。

實際、スキーの競走が盛んになつてからは、「只速く走つて勝ちさへすれば、それでスキーが上手だ」と云ふ風に考へる人が多くなつて來た。此弊風は特に中等學校のスキーランナーの間に著しく、吾々の見聞する所によると大低はスキーの選手と選手以外のスキーランナーとを別扱にして居る。猫も杓子も一度選手と云ふ名を冠くと、急に數段偉く成つた

樣にすましこむ。其實、唯速く走ると云ふ事を除いて技術其他の點に於ては所謂選手なるものゝ中には隨分あやしいものが多い。それも、常に優勝して居る選手ならまだ良いが、單に競走に參加したと云ふに過ぎない殆んど其存在をすら認められない貧弱な選手までが一流振るには一寸まるらざるを得ない。一流二流三流と云ふ風にランナーを區別することの可否は別問題として、斯うしたならば或は此の弊を除く事が出來るかもしれない。斯樣に競走を重要視する傾向のある事は、恰も競泳が盛んになつてから、游泳の師範が競泳の選手より輕んぜられた事があつたのと同樣に決して觀迎すべき傾向ではなく寧ろスキーの墮落であると云つても過言ではあるまい。

實際、勝利は絶倫なる体力と優秀なる技とによつて得られるものであるから、ランナーは不斷の練習を怠つてはならない。然るに現在の所謂選手の内には、相當に技術の出來てる人は算へる程よりない。多くは体力の絶倫らしいのが選手となつて居る。さうであるから「私は選手であります」と云つて大きな顔をして居る人でも、滑らせると三文の値も無かつたり、平地滑走も碌に出來ないのが、多いのも無理がない。

各スキー團体のスキー大會等で行ふ二人三脚や跛競走や旗取(二十米程登つて旗をとつて滑つて來る競走)等は、競走と云へば競走であるが、寧ろ餘興とか遊戯とか云ふ風に見る方が適當であると思ふから、茲で云ふ競走の内には之を入れない。即ちこゝでは北大主催の中學校の驛傳競走や小樽高商主催の實業團の驛傳競走を中心として論ずる事にする。山地の競走と云つても萬一を慮つて險岨な所を避けて居るから、要するに競走の根本となるものは平地滑走であると信ずる。其上、巧妙な平地滑走をする爲には他の技術をも相當にこなせる必要があり、吾々の知つて居る範圍内では平地滑走が巧みで他の技術が零であると云ふ樣な人は一人もなく、平地滑走の上手な人は皆相當に直滑降もやれるし、スウヰングもやれる人である。

誠に平地滑走は一見何の面白味もない樣であるが、實際之をやつて見ると、他の天地に在る人々のあづかり知らぬ一種の趣があものである。たとへば、こゝに、鉛色の空低く翼を張る一羽の鳥の姿さへ眼にとまらない果しもなく續く眞白な雪の平原があつて、其上を輕く快い音を立て乍ら唯一筋のスプールを殘して複杖のリングが奏づる妙なる音樂に耳を傾けつゝ沈默の歩を運ぶ人の姿を想像しても見給へ。一種のインスピレーションにうたれざるを得ないではないか。

競走と云ふ事を考へなくても平地滑走は充分之を行ふ價値のあるものであるが、特に競走に參加するランナーは是非之を練習する必要がある。平地滑走も出來ないで、たゞがんばればいゝんだと云ふ樣な人は、宜しく「スキーの競

走」をやると云ふのをやめた方が良からう。正式の泳ぎ方を知らないで競泳に出る人は少ない。然るに現今のスキーの競走には平地滑走を知らないで參加して居る人が多いらしい。やがて、それらの人々の滅びる日の來る事を知つて居る者にとつて、それは誠に嘆かはしい事である。

斯くの如く、平地滑走はスキー術特に競走に於て重要な地位を占むるにも拘らず、眞面目に之を研究し練習する人の少ないのは、實に悲しむべき現象である。外國の書物にも平地滑走に就いて深い研究を示して居るものが無いらしい。

元來、スキーは一度やり出したらやめられなくなると共に、スキーをやる人には自惚家が多い。競走の選手が自惚れるのは、自惚れる者自身が間違つて居ると共に、周圍の人々も惡い。例へばこゝに甲乙二人のスキーランナーがあり、甲は競走の選手で技術は貧弱であるが走らせると可成り速く、乙は立派な技術を持ち乍ら競走では到底甲の敵でないとする。此時、果して何れが「スキーが上手だ」と云へるだらうか。甲は技術の方面を殆んど考へず只競走のみを眼中に置いて自分の優越を感ずるであらうし、乙は競走では負けると云ふ考が頭の中にあるので、競走を重要視し過ぎるきらひのある所では、乙は技術上に於ける自己の優越を以て甲に對することをしないで、どうしても多少甲に壓迫され勝ちである。此の場合に、乙の優秀な技術を認める人が多いと問題はないのであるが、一般の人は矢張り競走に勝つのを以て「スキーが上手だ」とするので、乙も自然さう考へざるを得なくなるのは無理がない。だから、技術上の競技も競走と同樣に行はれて之が人々の興味の中心となる樣になり、競走の選手と競技の選手とが同等の取扱を受ける樣になつたら、一方に偏することが無くなつて案外旨く行くかもしれない。

此の意味に於てスウヰングやジャンプの競技が競走と同樣に行はれる樣になる事を望んでやまない。然しスウヰングの競技の審判は競走の樣にたやすくは出來ない。が、外國では之を行つて居るらしいし、又日本でもやつた事があるのであるから出來ない事は無からう。但しスウヰングの競技を行ふには、競技者以上の技術を有する審査員が必要である。尙其上、審査はどうしても審査員の主觀によるので、其結果は絶對的のものではないが、競辯會に於て辯論に等級を附するのを認めると同じ意味で、審査員を信任して之を行つたら大した不都合も無い樣に思はれる。

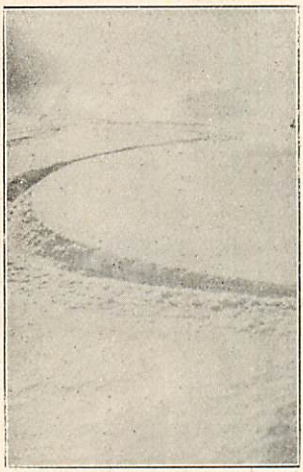
驛傳競走が、スキー術の基礎たる平地滑走に眼醒めしめた事は、スキー界のために貢献する所が大であるが、之に反して「競走の爲のスキー」と云ふ誤つた考が一般に漲らうとする傾向を示してゐるのは決して喜ぶべき事ではない。若し「競走するためにスキーをやるのだ。」と云ふ人が居るなら、その人にとつては斯うなることは良いかも知れぬが、

競走がスキーの全部であると云ふのは余り極端ではあるまいか。

或る人が、近頃スキーが競走本位選手本位になつて來たのを憤慨して「競走の爲にやる位ならスキーをやめた方がよかろう」と云つたそうである。然し競走には短所があると同樣に長所もあり、しかもその長所は中々捨て難いものである。だから之を行ふ事は一向差支ない。が、競走を以てスキーの全部と見る事だけはどうしてもやめてもらひたいものである。

スキーには一種不可思議な魅力があつて、それにひきつけられて一度スキーをやり出したらやめられなくなるのはスキーには競走とか競技とかを超越したある神秘なものがあるからであるらしく思はれる。スキーを穿いて、あの清淨な美しい大自然の懷に抱かれる時には、誰しもさう思はざるを得なくなるであらう。さうして見ると、競技とか競走とかと云つてこせついて居るのは大したものでなくなる。そして、その「スキーが持つ神秘」に憧憬の眸を輝かしつゝ敬虔な心をもつて、憧憬の冬を享樂する事こそ、眞に吾々スキーランナーが欲求する所のものではなからうか。

（一九二一、一一、二〇、）



スウイングに就て

新潟高等學校スキー部　仙波正雄

愈々我々スキーファンの熱狂するシーズンとなりました。我々の手近かにある數種の著書を讀んでゐる内に少し氣附いた事項がありました。隨分亂暴な間違ひや考へ違ひもあるでせうが、少しでも研究の足しにもならうかと思つて述べて見ます。

一　テレマークスウイングに就て

二三の著書を通覽して見た所大体に於て高橋翠郊氏の說とビビアンカウルフィールド氏のそれに分つ事が出來るやうですから、こゝではこの二つについて述べることゝする文中の文句は必ずしも原文の通りではない。

カウルフィールド氏はその著ハウツースキーの中で「廻轉中は体を内部に掛ける事を避けよ」と說いている。高橋氏は「スキー家に」に於てテレマークは身体を廻轉の軌跡の内方に傾ける事によつて生ずる体重を水平分力卽ち求心力（氏は遠心力と云つて居らるゝが求心力の間違ひであらう）によつて廻轉するのである」と云ふ意味を述べて居られるが私の考へた所、元來雪は如何に良好な場合でも相當の側面抵抗（サイドスリップに對する抵抗）を有しているものであるから氏の云はるゝ如く全然力學的圓運動の樣に求心力の作用ばかりでは廻轉出來るものではない。後出スキーの舵作用と前出スキーの僅かな横滑りとによるものであると思ふ。

併しカウルフィールド氏の如く廻轉の大部分に於て「全然重心を廻轉の内側に落してはいけない」と云ふのも、内方へ轉倒しない範圍であれば何等その注意の必要は無いと思ふ。何故なれば重心を内側に落すことによつて生ずる求心力は幾らか圓運動を助けるからである。寧ろ此動作は舵作用と横滑りとを補助し停止或は廻轉を確實にするものである。

次に体重の配置に就いても兩氏の意見は異つている。高橋氏は「体重は前出スキーの前部に置く」やうに云つて居られるが、カウルフィールド氏は「爪先を上げるやうに即ち体重をスキーの後部に置く」やうに述べている。

テレマークも他のスウイングに比べると少ではあるが、前にも述べた如く前出スキーの横滑りによるものである。この意味から考へて体重は前出スキーの後部に托す方が合理的であり且つ實驗しても行ひ易いと考へている。

併しダウンヒルに於ては廻轉の初期に於て前出スキーに谷側に廻轉し滑らせるために体重を前部に置かねばならぬ事は勿論である。

二　クリスチヤニヤスウイングに就て

ステイヤードクリスチヤニヤに於ても兩氏の意見は大分異つている所がある。

先づ高橋氏の方から云へば、氏は此のスウイングに於てもスキーの操舵作用によらず、「重心を後山方に落し（氏は此の重心の斜面上に方ける射影の位置を傾斜角に關係して幾何學的に說明して居られる）体重を兩スキーの後部に置く事によつて生ずる横滑りのみによつて「廻轉する」やう

轉　廻　躍　跳

Drehsprung はまた Craluna Sprung とも云ふ。此の技術は初め Craluna 氏によつて行はれたからである。上掲寫眞は同氏なり。

Phot. H. F. Goshawk

に述べて居られる。

カウルフィールド氏は「一方のスキー即ち前出スキーの後部に体重を置く事と体重の掛からざる後出スキーの舵作用とによる、体重の配置と兩スキーの相互位置とによつて廻轉するのである」と述べている。又氏はスティヤードクリスチニヤを二つの方法に分けて居るがいづれにしても体重は一方のスキーのみにある事は明かである。私は此の二つの説を比較し經驗を辿つて考へて見るに、先づスキーの相互位置を体重の配置とに就いて云つて見ると、此のスウィングに於ても廻轉を初めるにはどうしても高橋氏の如く兩スキーを平行させ其等の後部に体重を置くのみでは廻轉が初め難い、尤も練習場などの踏み固められた斜面では唯この動作のみで廻轉する事が出來る。初歩者によく見る兩スキーの後端を交叉して踏ん張れる失敗は多くの場合この兩スキーに体重を置くことによつている。

直線運動より廻轉運動に移るには、どうしても何れか一方のスキーの舵作用によつて廻轉を初めなければならない是れが爲めには兩スキーの先端を僅かの角を保つて開き体重は舵作用をなさざるスキーの上になければならない。と思ふのである。しかし此の事は廻轉の初めの部分であつて横滑りの狀態に移つてからは兩スキーは平行に、体重は平等に掛つていなければいけない。以上はスティヤードに就てゞ、ジャークドでは廻轉の最初から此の狀態にある事は勿論である。

重心を落す事に於ては、兩氏の説は矢張り異つている。即ち高橋氏は前に述べた如く幾何學的に重心を落す位置を見出し、是に適應するやうに身体を後山方に倒す事によつて廻轉するのであると説いている。カウルフィールド氏は体を山方に倒す事は無益だと云つている。此の二つの説に就いては前にテレマークの所で述べた事が殆んどその儘持つて來られるから略するが、唯此スウィングに於てはテレマークの場合よりより以上に重心を廻轉の後内方に落す事は確に有効である。決してカウルフィールド氏の如く避けるべき性質のものではないと思ふ。

◈吹雪夜話

□堀内中將の書信中に、『スキーは杖にて進むものに、あらず腹にて勇躍邁進するものなり』と云つて居られる。杖で進むもので有るかないかは第二として、『腹にて勇躍邁進するものなり。』は確に至言である。有名なる悟道より得た偉大なる暗示であらふ。

札幌附近の地形學的考察（二）

夏　間　生

山及山の成因

山と云ふ物は一般に陸地の内で幾分かの高さを有した凸起した部分の總稱である。山は初めから或る形をしたものと、後から河や其他の浸蝕の彫刻によつて形を變化したものとある。

山は地球が出來た當時から今日に至る間に、地殼に凸凹が生じた物の内の凸部である。即ち山は地球の歴史と共に生れ或は變化したものである。山を其の成因によつて分類すると次の三種となる。

一、火　山（Volcanic mountain）
二、皺曲山（Folded mountain）
三、片塊山（Block mountain）

一、火　山

火山は誰も知る樣に、地球の内部にある岩漿(magma)が地上に溶岩となつて噴出して出來たものである。此の岩漿は地中の深い所で比較的白色である酸性の岩漿と、黑色を帶る鹽基性の岩漿に分かたれて、此等が地表に噴出して白色の岩石と、黑色の岩石とになる。一般酸性の岩石の山は鹽基性の山より峻險であり、鹽基性の岩は臺地を作る事がある。

火山の形は其の噴出した時の噴出物の積り方によつて異なるが、普通は富士山の樣な圓錐形のものであるけれども寄生火山や次次に起る噴出の爲めに色々と形を變へて來る溶岩が地表に噴出したものと地表に現はれずして地下で固まつたものとがある。表面噴出したものは吾々が其を噴出當時より見る事が出來るが、地上に噴出しないものは其の上にある土地が取去られた後に初めて見る事が出來る。此岩石は水成岩よりは堅くある爲に、或る地方では獨立した山体をなして殘る事がある。此を(monodock)と稱して居る

二、皺曲山

此は地殼が延び縮みする時に皺曲し、地層が山となつて現はれたものである。此の皺曲が地層に生ずる原因に種々ある。其の内の主なる物は次の通である

陸地から河や其他の物で破壞せられた物質は、年々非常な量であつて其が運搬されて常に海中に沈積しつゝあるのである。此の沈積の重量が海底を壓迫するのと陸地は削磨及運搬の結果刻々と其の荷重は減少しつゝある。それで海底は常に沈降し陸地は上昇しつゝある。然るに海底と陸地は一續きものであるのに一方が常に上昇し一方が常に沈下しては此の兩者の間に隙間が生じなければならぬが幸に地球の深い所は岩石が液体の樣に流動する場所である。其のために、高い所は何日迄も高く、低い所は何日迄も低くある。(此は地球上を大觀した場合であつて山と云ふ一小部分でない事を知つて頂きたい) 其故に海と陸地の境には、沈積の層は互に押されて皺面を生ずるのである。また地下では岩漿のラジヂアクチビチーによつて、岩石が熱せられて膨脹する爲めに地殼の一部が隆起皺曲すると稱する人もある。皺曲の山例はアルプスやヒマラヤの如きものである。

三、片塊山

地殼の一部が、斷層によつて切られて其の一部は隆起し一部は陷落して此所に山が生じたものである。此の片塊山は初め斷層によつて片塊を作つたものであるか否によつて定まるので、或る場合には單に浸蝕削磨で出來た山と區別が出來ないものがある。

以上の各種の山は風雨雪によつて變化せられて生成當時と全く異た地形に變化する。

岩石の性質の異りによつて高低が生ずる。山も河と同じく若い形から老年の地形に進む。此は河の場合の谷の形によつて其の山の外觀を知る事が出來るから此の說明は略する。

山を作つて居る岩石が柔であるか降雨量が多いと老年に速くなりやすい。山が削磨作用を極度に受けると、谷の廣い小高い波狀の丘陵と變る。此を準平原 (Peneplain) と稱して居る。此の準平原は陸地の上昇と共に新しい削磨を受けて即「若返り」の地形となる。一見複雜した連山も、遠くより其の頂上を望觀すると、一直線になつて現はれる。此は昔の準平原の跡である。或る場合は平原が上昇して高原を作る事もある。此の場合には上昇の速度や岩石の性質及び其の地方の氣候によつて高原性の場合と普通の山の形を呈するものとがある。

山は傾斜が或る程度を越へると、或る機會に地辷や山崩れを起す。氷河によつては形が特種のものとなる。山頂は風化の度が麓よりも少い爲めに出來當時のまゝで峻嶮であり、また角の多い岩塊が澤山ある時もある。

スキージヤムプの研究

ザッツこは。

北海道帝國大學スキー部　廣田戸七郎

「ザッツ」とは之を邦譯して「踏み切り」といふのが適切と思はれる。

ザッツとは前號に說明したる如く、屈身姿勢の最後の瞬間的の動作であつて、スキージヤムピングに於て最も重要な、困難な、六ヶ敷い姿勢で、實際この動作如何によつて飛躍の成功如何が確證せらるるもので、この動作が完全に、安全に出來る樣になつたら其人は慥かにスキー術の蘊奧を極め得た人と云つて過言でないと思ふ。

さてこの踏み切りには二つの目的があると考へられる。

(一)最も長い距離を飛ばんが爲。

(二)飛躍者の体を着陸に際して斜面に直角にせんが爲。

特にこの後者は大切なことである。スキージヤムピングの踏み切りは決して巾飛びの如く跳躍するのではなく、飛臺の端から二米半乃至四米位の距離のところで、屈身姿勢から急に体を伸して、前方に滑り投げるのである。疾走高飛や、疾走巾飛の樣に踏み切つて飛臺を離れても、決して長くも飛べず、反つて轉倒の原因となるばかりである。如何となれば上方より滑降して來て後たる加速度が、常に下方に働いて益々大となるばかりであるから、飛臺のところで蹴つて後方に壓迫しても、その償として下方に向ふ加速度は更に加はらず、却てその加速度が減ぜらるることとなるからである。

それから踏み切りは遅過ぎても、早過ぎてもいけない。遅過ぎると飛臺を離れても伸び切らぬ爲に、勢ひ空間に於て踏み切りを完成せなければならぬことになり、夫れが仲々甘く行かないものである。或場合には体が廻り過ぎて臀から落ちる、眞すぐに落ちることもあらうし、横に体が曲つて落ちる樣な事もある。又低い〳〵ほんの初歩の、簡單な飛臺から離れる時には、遅く伸びるものであるから、つい体とスキーが前に屈みすぎて、一緒に前方にのめつて飛揚距離に差支を生ずるばかりでなく、着陸に際してスキーが着陸面にささつたりする樣になる場合もある。前者は普通最も有勝なことである。特に初歩者の陷り易い弊はこの踏み切りの遅れ勝なこと、夫れに疾走中飛び的に踏み切る爲に体を空中で直す暇もなく臀から落ちることで之は全く新參の狩獵家が梢にとまつて居る小鳥を捕へんとして、狙を定めてズドンと打つた時には、鳥はもう向ふの空遠くへ飛んでしまつて、打たれた小枝が無情相に折れて居るといふ樣なもので、初歩の内は全く飛臺から離れたと思ふと踏み切りが遅れて臀餅をつくことが多いのである。

これと反對に、踏み切りが早過ぎると体か飛臺の上で伸び切つてしまう爲に、次の瞬間即ち空中に出た時に、大概兩脚のスキーが平行して揃はず、自分の得意の方の足のスキーが前に出て見苦しい姿勢となり、体を前に懸けることが六ヶ敷くなつて、更に着陸に際して兩スキーが、夫々單獨的に地について、安全なテレマークポジションに移ることが出來ず轉倒を招くであらう。飛揚距離の縮ることは明かなことである。然し踏み切りが早過ぎるといふことは、割合に低い初歩の危險の少い飛臺では着陸に際して立ち後ることが多い。そして危險が少いから左程憂ふるに足らぬと思ふ。

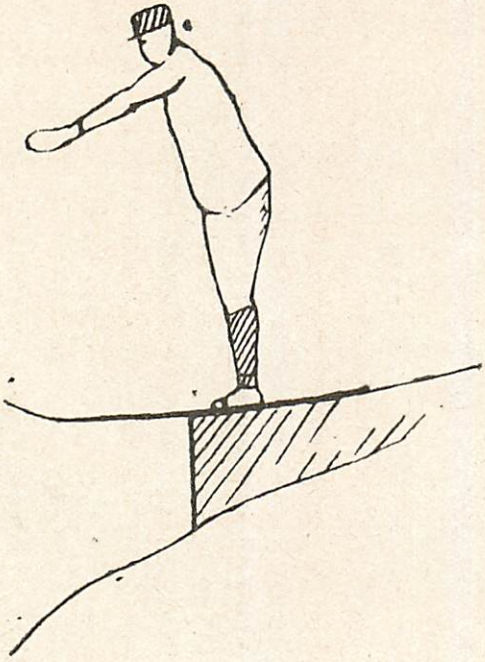
さてもう少し踏み切りの方法について研究して見るに、今飛躍者が飛臺の上で急に飛臺を離れずに滑走して、單に前下方に全く落下的に飛臺を離れたとするならば、飛揚距離は非常に短く、全く力のぬけた樣なジャムピングとなる（圖のaの如し）。

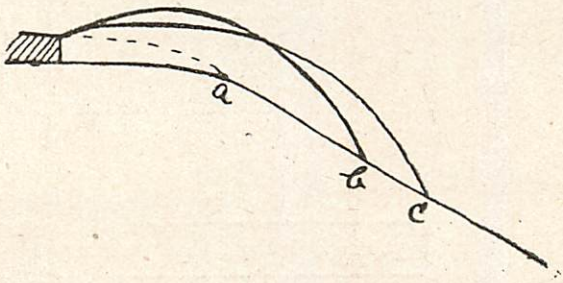
又次に飛躍者が非常に力を入れて踏み切る時には、体が高く揚りすぎて、駈け出しの勢が降下の對力の爲めに減ぜられて、十分に甘く飛ぶことは出來ない。（圖bの如し）

若しも飛躍の勢が十分に着力の勢に現はるゝ樣に、駈け出しが作られて居るならば、そして又夫れによつて、着陸に際して体を着陸斜面の角度に十分適應したる所置にとることが出來る樣に踏み切るならば、最も立派な飛揚をして最長距離に達し得らるるのであらう。（圖cの如し）

この三つの場合を考へて見るに、aは全く落下的で、即ち滑り落ち的で特に踏み切りの力を加へて居らぬやり方で實際やつて見ても容易に成功し得るやり方で、初歩者も、全く踏み切りといふ事を度外視して、唯々この滑り落ち丈

Phot. Walty G.




a
b
c

を練習して居る間は、時々飛揚して好結果を得て、相當ジャムピングに自信を得たといふ樣な氣持になるが、さて夫から一歩進んで踏め切りの力を利用して飛ぶといふ段になると、仲々甘く行かず尠からず自信を失ふ樣な時期に入るであらう。夫は今迄の自信を以て、うんと踏み切つて遠くへ飛んでやらうといふ樣なけちな野心が、手傳つて來る爲に、結局bの樣な調子になつて、有効に踏み切りが利用出來なくなるのである。bの樣な踏み切りは高く許り上つて結局エネルギーの浪費に終るのである。初歩の練習者は、aのやり方を根氣よく練習して、其間に少しづつ踏み切り力の入れ工合を工夫してやるがよからう。夫には先づ上半身を、前方に傾ける事を充分會得する迄練習する必要がある。もう思ひ切り前方に傾ける樣に、然し云ふまでもなく決して腰を曲げて、上体と下体の方向が一致せぬ樣な姿勢ではいけない。

cはa、bの時期にいろ〳〵苦しさ、辛さを嘗めて、始めて到達せらるる性質のものである。

思ふに如何なる作り方のシャンツェで飛ぶにせよ、踏切りは之を次の二方法に分つことが出來るだらう。

一、兩腕を後方に引いて踏切る場合

二、兩腕を前方に突き出して踏み切る場合

前者は主にテレマーク地方の飛躍者が行ふ方法で之をテレマーク型といふて居る。

後者は之をクリスチアニア型と云ひ、主にクリスチアニア地方の飛躍者が斯うした姿勢で飛ぶのである。

斯うした二者の差異の生じたのも全く、土地の斜面の狀態の然らしむるところで、テレマーク地方では馳け出しの斜面の急峻さを利用して、うんとピードを出して、シャンツェは低く作つて、遠くへ飛ぶ樣にするのである。クリスチアニア地方では割合に馳け出しの斜面が緩かな爲に、餘りスピードも出ぬから、從つてシャンツェを高くして遠くへ飛ぶといふ方法をとつて居るのである。

今兩者のレコードを比較して見ると、殆んど相似たる結果を生じて居る事を知るのである。で一概に兩者の優劣は論じ兼ねる次第であるが、然らば割合にジャムピング用斜面として、好適の丘を有たぬ、我國に於て、初歩者は何れの方法によつて行ふが、よからうかを論じて見度いと思ふ

若しも今吾人が急斜面といふ定義を假りに下し得るものとせば、吾人は少く共急斜面とは、實測卅度以上の傾斜面と定義したい。一寸考へると成程卅度の斜面などは、緩い樣に思はれるが、殊に角度的觀念の薄い一般の人とか、中學生諸君は往々にして、二十度位の斜面をとらへて、卅度とか、四十度などといふ突飛な答をせらるる方が多い樣であるが、仲々卅度以上の斜面といふものは得難いものである。ましてジャムピングをなし得る程の距離をもつ卅度以上の斜面といふものは仲々無いものである。で前述の定義

を適用すれば、テレマーク型の踏み切りは少くとも三十度以上の斜面に於て駈け出しを作り、踏み切ることになるが、普通の直滑降さへ行ふに難しい斜面に於て、超越的なジャムピングを行ふのであるから、餘程普通の直滑降に自信のある、そして落付いて居る人でなくては六ヶ敷しいことと思ふ。實際熟練な人でも三十度以上の斜面で直滑降をやることさへ已に？であらう。然し夫れも、駈け出しが十米位で着陸が三十米位で臺の高さが〇、參米乃至〇、六米位の小さい、ほんの型丈の練習の場合なら或は左程六ヶ敷くないかも知れぬ。然し僕等の經驗では仲々左う容易でないことが判る。

さて次に割合に緩い斜面の駈け出しで、飛臺の高さを高くするクリスチアニアジャムピング型では如何といふに、之は飛臺が高いので（大低彼地の高さは二米―二、三米以上らしい。）踏み切りは凄味があると思はれる。然し駈け出しが緩い（二十度前後ならん）から普通の直滑降を相當仕上げ得た人にとつては、途中で考へる餘裕も十分あらうし、形の崩れたのも直し得るし、又兩腕を樂に前方に突き出すのであるから、慥かにやり易いと思はれる。練習的な小さいシャンツェで行ふにしたところで、前者の練習より進歩も早くて、入り易い方法と思ふ。自分は入り易くして、極め易い後者を一般に初歩者におすゝめし度い。

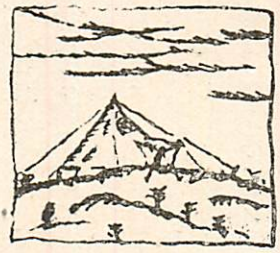
相當ジャムピングを習得した人は、兩者の踏み切り方法を共に練習せられん事を勤める。然し未熟な、研究の淺い私に、今若し何れが本當に合理的で、有効な方法であるかといふ質問をする人があるとするならば、殘念乍ら私は全く斷定的な返答を答へ得ぬのである。何となれば今全くジャムピングを知らぬ人をつかまへて、低い姿勢から急にヌット起き上る際に、手を前方に振り出して起き上る方法と兩手を後方に引いてヌット起き上る方法と、何れが立上り易いかと問ふたなら、問はれた人は前者の型が後者の型よりも遙かにやり易いといふであらう。そして同時に後者の方は前者よりも、前方に体が屈み易いといふことを知るであらう。

思ふに手を前方に振り出すといふ型に於ては、体を前に屈める割合は四割位で、高く上る力が六割位になつて居るその證據に初めてシャムピングをやらうといふ人に、前方に腕を振り出す方法を說明して、飛揚せしめると前述のb圖の樣な工合になつて、ひどいのになると落ちてから臀餅をつく。

つまりb圖の樣な弊害を避くる爲に、テレマーク型では腕を後方に振る樣になつたものと思ふ。

之に反して後方に腕を引く方法では、前方に屈む割合が八割位で、高く上る力は二割位のものである。つまり前述のb圖の場合の樣な弊害を避くる爲に、テレマーク型ではこの方法に進んだのであらうと思ふ。殊にシャンツェが水

平に近い樣な角度で作つてあると、非常にト圖の弊に陷り易い。斯樣に考へて見ると、後者はさうゆう點に行くと慥かに、合理的である。然し初歩者にはこの方法は仲々六ケ敷い、で私は實際的にやり易い方法である前者の方法をお勸めするのである。



山の色とスキー

六鹿一彦

私は嘗て冬の山をスキー滑走地として見た時に次の樣に分類した事があつた。

一、黑と白との山
二、茶と白との山
三、純白の山
四、黑い山
五、茶色の山

右の分類の中で最初の物程、スキー地に適して居ると自分獨りで定めて居た。又今も尙そう定めて居る。將來とても更るまい。

黑は針葉樹を指し、茶は濶葉樹を示すと云へばスキーランナーである以上、詳しい說明は加へずとも、私の分類が當つて居る事を首肯されるであらう。しかし黑と白との山が茶と白との山に優つて居る理由に就いては、私に云はすと仲々屁理窟がつけ得られるのである。此の屁理窟を諸君から批評して戴いて、此の方面に關する研究を進め度いと思ふ。

黑と云ふ針葉樹も私の獨斷でエゾマツとトドマツとに限つてしまつた。茶と云ふ濶葉樹もカンバに限定して論斷して居る。何故かと云ふに、北海道のスキー地を蔽つて、其

の山腹が最上のスキーブラッッとなつて居るのは、黒ではエゾトド、茶ではカンバの類であるからだ。分類は現實の事象を取扱ふ、だから此れでよいのだ。

スキー滑走に對する森林の價値は一度毛無山のガラ雪とベタ雪とで苦しめられた人には説明を要する事ではあるまい。即ち森林は風の襲來を防いで、粉雪の飛散や堅硬化を防禦するのであるが、其れ以上に温度の調節と雪の招致との効がある。そして此の働に於て黒と茶とはどちらが大きいかと云へば、誰が見ても黒の方が偉いと斷定する。ダケカンバの林では風を防ぐと云つても、其の効果は極めて微弱である。大吹雪が來たからと云つて、イワチヌブリ邊のカンバ林に逃げ込んだとて、何程の効果があらうか。此の點に於てカンバはエゾに一歩を讓らねばならぬ。

又無風快晴の日に烈しい日光の直射を防ぐのには、枝葉の充實したエゾでなければならぬ。其上雪面に落ちる光線も、雪面から反射する熱も悉く其の葉の生活細胞に吸收利用して空間に溢れる熱量を減少さす作用に至つては、カンバの茶色の夢想だにも及ばぬ事である。尚其上に繁茂した枝葉によつて空氣の流通を雪面上近くに於て遮斷し、下界から昇騰する高温の氣流を直接雪面に觸れしめない働がある。

右は消極的に雪を保護する作用であるが、更に進んでは積極的に雪を增加する作用がエゾに於て著しい。即ち氣温の低下が大である爲に他の山岳よりも尚一層水蒸氣の凝結を誘致して雲を招き、降雪を多からしめるものである。

以上述べた比較は客觀的事實に基くものであるが、尚此の外に山岳の景觀が私等に與へる美的印象から考究してもエゾ、カンバ共に純白の雪に配合した森林の復雜にして調和した山岳美を現す點に於ては同樣であつても、スキーランナーとして此の景觀を眺める時には、其の間に明なる優劣を認めるのである。畵かる可きカンヴスは同じ白色の雪ではあるが、畵かるゝ物体の形象が異つて來る。色彩が變つて來る。だから其處に作りあげられた一つの藝術品が私等に與へる印象は甚しく異つたものとなるのが當然である差異はやがて優劣を生じて來る。此の點に於て又エゾはカンバに打ち勝つのである。

エゾの樹冠は圓錐形である。其の沖天を指して尖つた樹梢は永遠を思はしめる。悠久を思はしめる。從つて壯嚴とか崇高とか雄大とか云ふ感じを懷かしめて、思をおちつかせ、引き締まらす。此の印象は更に暗綠色とと冷たい、おちついた色彩によつて一層强められる。處でカンバの方はどうかと見るに、其の樹冠は圓形から傘形をとつて居て、圓滿を思はす。從つて華麗とか淸澄とか溫和とか云ふ感じを與へて、心を浮き立たせ、輕くする。其上其枝梢を飾る色彩は茶褐色で、暖い、華かな印象を强めるものである。女で云へば上品でしとやかな令夫人がエゾマツに當り、あ

でやかな快活な女優がカンバに當るとでも云はうか。

之を要するにエゾマツの方は崇高幽玄な美と冷たい感じとを與へ、カンバの方は華麗清澄な美と暖い感じとを與へる。此の印象の差異がスキーランナーの心に此の兩者に對する好惡の情を起さしめるのである。

寒暖計の水銀が小さく下の方に縮んで居さへすれば御機嫌のよいのがスキーランナーであるから、冷たい暗い印象を與へるエゾマツの方が御機嫌に叶ふのである。褐色の小枝がコンモリと茂つて櫻の花盛りかと思はれる艶麗華美なダケカンバの木立を望んだ時には、何だか今にも粉雨がグジャ〳〵と融け始めて、靴の中が水氣で濕つて來そうな不安に捕はれ勝である。「神秘なる森の誘惑」なんて事は此の明い、華かなカンバの林では藥にしたくても味はれない。

此れは主觀的印象による優劣であつて、スキー滑走には何等の關係も及ぼさない事ではあるが、山に入る程のスキーランナーである以上は、單なる滑走をのみ目的としないだらうから、周圍の山岳なり森林なりが與へる印象と云ふものが非常に大切になつて來る。ヤンキーが大槍を建てゝヂャンプをやるが、あれは單にレコードを作ると云ふのみで、スキーによつて味ひ得る山とか雪とか森とか云ふ物を全く離れてしまつて居る。彼等の頭にはレコード〳〵と云ふ事以外何物もあるまい。つまらない話だ。之をつまらない話だと云はぬ樣なンキーランナーは山へは入るまい。だから此の審美觀的價値より見て黒と茶との優劣を定めるのは無理でないと信ずる。

更に轉じてエゾマツ林が雪に及ぼす好影響が尙此以外に私等の感情に好感を與へる一事に思ひ及んで見度い。冬の期間は短い。スキーランナーにとつては確に短い。從つて一種の執着心である冬に對する名殘惜しさが隨分に強い。之に滿足を與へるのが雪質を遲くまで粉雪に保つエゾトドの森である。春の女神の息吹に融け行く雪の野から逃れてスキーランナーが逝く冬を惜しむ最後の場所は深い暗いエゾマツの森である。

エゾはカンバに勝る。黒と白との山は茶と白との山より優れて居る事は明白な事實である。

本邦に於けるスキーの團体（三）

照會事項

一、加入會員數及性質。
二、組織。支部の有無。
三、設立年月日。
四、事業。刊行物の有無。
五、事務所。（事務所にあらざるも會團の中心となり照會、通信をなし有る宛名）
六、首腦者。
七、會員の主なる滑走地。
八、主なる研究事項。技術上の傾向。
九、會員の有する記錄。
　A　飛躍（距離、年月、姓名）
　B　長距離滑走（同上）
　C　登山（山名、標高、登山回數）
　到着順掲載

北海道廳員スキー會

一、五十二名。道廳に俸職する官吏。
二、別に取立て言ふ程の事なし會員が適宜集會滑走するに止まる
三、大正八年十二月
四、イ、冬期積雪期間毎週土曜日退廳後參集、圓山、琴似又は輕川方面に滑走練習す。
　ロ、斯道に堪能の士を聘して講習を受く。
五、北海道廳勸業課内、北海道廳員スキー會
六、北島良一、乘竹映一、
七、圓山麓。琴似輕川の斜面。
八、九、未熟なるもの多くして取立て擧ぐる程の事なし。

北海道帝國大學文武會スキー部

一、教官、學生、生徒、約百名。
二、文武會の一部。
三、明治四十五年六月
四、大正七年「スキー術教程」刊行。

毎年十二月下旬合宿練習を行ひ中堅とる可き部員を養成す。
毎年一月下旬より約一ヶ月合宿し、ジヤムプの研究をなす。
毎年三月下旬約一週間ジヤムプ練習の爲合宿す。
毎年一回部員スキー大會を會催す。
一月最終日曜中等學校札樽スキー驛傳競走を擧行す。
其他隨時、展覽會、幻燈講演會、研究會等を催す。
五、札幌區、北海道帝國大學文武會スキー部。
六、部長並河功。主任幹事(第十三シーズン)中野誠一。
七、札幌西方の琴似、圓山、輕川、手稲山。
八、スキー冬期登山等に關する全ての事項の合理的研究。
純然ゝ所謂山藁畑藁に別れて技術上の研究をなす。
九、A、二十m、大正八年、大矢敏範。
B、三〇・二k、m、五時間十二分。札幌小樽間。百二十五km、中山峠—キモベツ岳。大正八年二月
C、富士山。(三七七八m)大正三年一月。途中よりアイスクリーパーを以て頂上に達す。
檢ケ岳。(三一七九)乘越まで。大正十年四月
金田峠。(一八七三)大正八年一月
八甲田山。大正七年三月
手稲山。(一〇二三)約三十五回
奥手稲連山。九回
毛無山。(六五四)約十五回
蝦失富士。(一八九三)五回(登頂二回)
アシュベツ岳。(一七二七)二回(登頂一回)
百松澤山。(一〇三八)二回
イソオヌプリ。(一一五四)二回
チセヌプリ。(一一三四)大正十年一月
ニセコアンヌプリ。(一三〇八)八年二月
ムイネシリ岳。(一四六〇)十年一月
キモベツ岳。(一一七六)九年二月
朝里岳。(一二八〇)十年二月
余市岳。(一四八八)十年二月
昆布岳。(一〇四五)十年一月
十勝岳。(一八一二)九年三月
ヌタクカムシュベ山藁。十年三月
鈴谷山。(樺太)九年三月

學習院輔仁會旅行部スキー部

一、學習院學生
二、旅行部に屬す。
三、レルヒ氏第一回講習に本院學生の參加せし以來、倶樂部の組織なりしが大正八年輔仁會旅行部に屬する事となれり。
四、輔仁會雜誌に報告す。
五、東京市外、高田町、學習院輔仁會旅行部。
六、評議員、藤澤周次。委員、大久保寛一。岡部長量。
七、關溫泉及び五色溫泉。
八、未だ別段研究と稱する程のものなし。
九、常念澤夜營—槍澤—上高地—島々(大正八年三月)
大町—四谷—小谷—乙見峠—關溫泉。(大正十年三月)

山岳雜誌

◆草鞋◆

毎月一回發行

「草鞋」は、自然を深く見んとする人々、旅を愛する方々の、よき機關雜誌でありたいと思ひます。

「原人社」は、松本高等學校山岳部員、信濃山岳會員等の有志の集りです。

一部金參拾錢

▼第二號目次（十一月發行）

地形圖の處理に就いて　松井　幹雄
室堂から針の木へ　宮崎　謙二
山　十　首　堀　秀彦
溪　間　の　曉　赤地　汎
飯　豐　山　川上　俊秀

▼第三號目次（十二月發行）

山岳と登山の眞意　穴田　秀男
釜無山脈の地貌に就いて　三澤　勝衛
針　木　行　丸山止才夫
その他記事豐富

發行所
松本市土井尻町
原人社

スキー及び附屬用具

小樽區稻穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

大正十年六月七日第三種郵便物認可
大正十一年一月十四日印刷納本
大正十一年一月十五日發行

（毎月一回十五日發行）

山とスキー　第十一號

【定價金參拾錢】

スキーと附屬品

札幌南一條西五丁目

小谷運動具店

電話一五六八五番　振替小樽七九六四番

大正十一年一月十四日印刷納本　大正十一年一月十五日發行

（毎月一回十五日發行）

定價一部金參拾錢

編輯兼印刷者　板橋敬一

發行者　加納一郎

札幌區北一條西二丁目　印刷所　札幌印刷株式會社

發行所　山とスキー會

札幌區北三條西七丁目

振替口座小樽八四九五番